

実践報告

精神科デイケアにおける長期利用者への 看護に関する一考察（第二報）

—統合失調症利用者が同世代の社会生活のあり方を意識していく場面を通して—

福浦善友

【要旨】

本研究は、精神科デイケアの長期利用者（以下、利用者とする）が、同世代の社会生活のあり方を意識できるようになるための看護の視点を取り出すことを目的とする。研究対象は、デイケアから社会復帰の段階にある利用者へ意図的に関わった自己の看護過程である。利用者が、他の社会資源や家族のことなどを考えるように変化した3場面の分析から、看護の視点を4項目取り出した。

- ① 利用者がこれまでの生活のままではいけなさと振り返っていることを認めたとうえで、今後の生き方に目を向けてもらえるように働きかけていく
- ② [成人の生き方や働き方に関心を向ける][自分に何ができるか考える][自分の知らないことに驚く][自分の今後のあり方に危機感を抱く][家族との思い出に感情が動く][自分からやりたいことを表出する]という利用者の反応をよい変化と捉える
- ③ 自らできたことや考えたことを認めて、成功体験に目を向けてもらう
- ④ 家族とうまく向き合えていない体験が語られたら、一般的な家族内での役割を、具体例を交えながら今後のイメージがわくようにする

【キーワード】 精神科デイケアの長期利用者、同世代の社会生活、個別の関わり、就労、家族

I. 序論

我が国の精神科医療は、＜病院や施設中心の医療から地域社会での生活支援＞に方向転換し、地域社会での支援のあり方が重要視されている。精神障がい者（以下、利用者）への地域生活における支援を展開していく上で、社会復帰を図るあり方に精神科デイケアがある。厚生労働省は、「利用者の地域生活における自立をより促す観点から、デイケア等の、長期にわたる頻回な利用や長時間の利用については、それが漫然としたものにならないように促す方策を

検討すべきである。」¹⁾と指摘した。また最近の実態調査によれば、このデイケア利用者の80%は統合失調症であり、初回入所からの利用期間も5年以上が42.7%²⁾と、徐々に長期化・高齢化している傾向が報告された³⁾。

国は受け皿の整備を推進してきたが、近藤が「過去の隔離収容政策に基づく精神医療で、精神障害者が地域で生活していくために必要なリハビリテーションの視点をもったケアが育たなかった」⁴⁾と指摘し、坂田が「集団運営するだけのデイケアや、病状管理・

生活支援を行うだけの訪問看護では、病院が担うべき地域医療として不十分であり、個々のクライアントのリカバリーを明確に指向する関わり・サポートを実践していく必要性は明白であった⁵⁾と述べているように、今日のデイケアにとって、長期利用者の実社会への参加は大きな課題である。つまり、受け皿となる福祉施設の整備だけでは、利用者のニーズに十分に応じることができていないので、利用者が主体性をもって社会生活を送るための支援のあり方が必要となる。

しかし、その方策は未だに見出されていないように思われる。実際、精神科デイケアプログラムに積極的に参加する利用者や、就労希望の利用者に対する支援などに関する研究や報告は多いが、通所するだけの長期化した利用者の実社会への復帰や参加を促す関わりについての研究的取り組みは見出せなかった。

筆者は、そのような利用者の一人である長期に渡って精神科デイケアに通所しているが、デイケアプログラムには参加せず一人で過ごすことを続けてきた統合失調症利用者と向き合う機会を持ち、社会生活に目を向けることができるところまで関わりを持つことができた。その関わりを分析し、そのような利用者の根底にあった思いに利用者自身が気づき、社会生活に目を向けられるよう支えた看護について第一報として報告した⁶⁾。その後、引き続き関わりを持つなかで、さらに進展をみている。それは、その利用者が他の社会資源や働くこと、家族のことなどを考えるように心が動き始めたことである。言い換えれば、利用者が同世代の社会生活のあり方を意識できるようになった、とりもなおさず、実社会参加における自分のあるべき姿を具体的に描こうとし始めたことである。そこで、この間の関わりを分析し、同世代の社会生活のあり方を意識できるよう支えるための看護の視点を取り出したので、第二報として報告する。

II. 対象と方法

1. 研究対象

統合失調症の精神科デイケア長期利用者（以下、Aとする）に、同世代の社会生活のあり方を意識できるように促した看護者の関わり。

＜利用者の紹介＞

A氏、40代前半、男性、統合失調症。大学を中退した後、自宅で引きこもった生活を送る。他県で単身生活を始めるが、数年後強制退去となった。精神科病院で長期の入院を経て自立支援アパート生活となる。現在までの6年間は、デイケアに通所しているが、プログラムに参加する事はほとんどなく一人で過ごす。

尚、筆者は、デイケアのスタッフナースではなく、研究者としてフリーの立場で看護を行った。

2. 研究方法

1) データ収集

2012年4月から9月の5ヶ月間。

筆者は、週1、2回デイケアに参加し、プログラムの役割は担わず、Aとの関わりを中心に活動する。Aが自立した社会生活へ発展することをめざし、デイケアスタッフと情報を共有し、関わりの方向性を検討しながら関わる。その関わりの内容をフィールドノートに記述した。

2) 研究素材の作成

(1) 看護実践のフィールドノートをもとに、関わりを持つ必要性を判断した場面ならびに、Aが社会生活についての思いや考えの変化が見られたと思われた場面のプロセスレコードに再構成する。

(2) Aの変化する過程が追えるように、その経過を「Aの言葉の変化」「Aの行動の変化」「看護者との関わり」に分けて経過表を作成する。

3) 分析方法

(1) 経過表を概観し、Aが自己のあるべき姿として同世代の社会生活のあり方について意識していると思われる言動が見られた場面を選定する。

(2) 場面毎に、Aが自分の社会生活を振り返り、同世代の社会生活のあり方を意識するような言動が表現されたその変化を捉え、Aにとってどのような意味があるといえるかをとり出す。

(3) (2)から、Aを実社会生活へ促すという観点から、看護者がどのような関わりを行っているのか看護者の認識と表現の特徴をとり出す。

(4) 各場面の看護者の認識と表現の特徴の共通性と相異性について吟味し、長期に渡って精神科デイケアには参加せず一人で過ごし続けてきた利用者に、同世代の社会生活のあり方を意識できるように促すとき、利用者の言動を、看護者としてどう捉え、そこからどのように表現すべきかの視点をとり出す。

倫理的配慮

本研究は、研究目的をA本人に口頭と文書にて説明し、また、筆者との関わりにおけるAの情報は、個人が特定されないよう研究に必要な事実のみ記述することとし、個人情報保護に努めることを条件にA本人から文書で同意を得た。また、今回の研究をおこなうことについては、当該施設の倫理委員会より承認を得た。

III. 結果

1. 場面の選定

長期入院を経験したAが、デイケア利用者となって長期に渡ってプログラムに参加せず一人で過ごしていたところ、筆者（以下、看護者）との関わりで、Aは「一人で過ごすことは本当は辛い」という思いを語った。これまで病院に慣れようとしてきたAは、看護者の提案した大学祭の見回りを手伝うことができ、社会生活に目を向け始めている（初日～担当24日後）。デイケアに留まる思いから社会生活に目を向け始めたAに、その思いを強化しようと考えた看護者が意図的に働きかけると、Aは同世代の労働のあり方（場面1、2）やうまくいっていない親子関係の理想とするイメージ（場面3）を膨らませるなど変化がみら

れている（～担当49日後）。ここで、2日間に渡って担当医師が参加するデイケアスタッフとのカンファレンスを行い、Aの変化を共有し、＜Aが、本来の40代男性に近づくように、実社会においてできることの選択肢の幅を広げて、積極的に体験を積み重ねて自分の生活に自信を持つことができる。＞という、関わりの方角性について確認した。

その後、それまで主に関わってきたスタッフは、看護者とAの関わりの内容を含めた振り返りや、今後の目標について話し合い、一方で、プログラム担当のスタッフが、Aにプログラムを手伝ってもらい働きかけなどを行い、デイケアのプログラムに参加する姿も見られた。Aは少しずつ就労を意識するような表現や、就労継続支援A型事業所での食事の希望、さらに就労継続支援B型事業所で精神障がい者が実際に働く様子を見学するに至った。

そこで、Aが自己のあるべき姿として、働くことや親子関係のあり方を意識した表現がみられた場面を転換点と捉えて、場面1、場面2、場面3を分析場面として選定した。この関わり経過を表1に示した。

2. 場面の分析過程

1) 場面1の分析過程

大学祭に参加できたことでこれまでの生活を振り返ったAが、働くことに初めて関心を向けることができた場面1の分析過程について述べる。この関わりを表2に示した。

大学祭に参加直後、「考えないで済む日々はおいしい」と語っていたAの思いを、社会において全うな考え方と思った看護者は、意図的にその思いを強めていこうと意識して尋ねると、Aは「大学祭に行けて自分でも驚いている。今までは病院で過ごせば困らないで済むと思っていた」と表現した。社会生活では困ることの連続という思いから、「困らないって変」と投げかけたところ、Aは同意しながらも、首をかしげた様子を見て、看護者は考え始めている、Aのもてる力と感じ、「自分で気づけたところがもてる力」と伝えるとAは喜んだ。

表1 精神科デイケア施設利用者の紹介と看護者が関わり始めた日からのAの変化の経過表

<p>利用者A 40代前半の男性で統合失調症。父親と妹の3人家族。母親はAが精神科病院に入院する前に亡くなっている。9歳、14歳のときに他県に転居している。地元の大学を中退後、実家で引きこもった生活をしていて、やり直したい思いから他県に単身生活をするが、数年後部屋の臭いに対して苦情がでて強制退去となる。その頃から精神科病院に入退院を繰り返し、長期の入院を経て自立支援アパートで単身生活となる。現在までの6年間デイケアへ通所している。</p>			
担当後	Aの言葉の変化	Aの行動の変化	看護者との関わり
初日	プログラムには参加しない。何もしない。		Aはプログラムに参加せず、昼食を待っていた。家族の話をするAは「父から家族の方に電話をしないでほしい」と言われており、妹とは10年以上会っていないし話していないと言った。
7日後	1日一人で過ごすのは辛い。何もやることない。		これまでのAの行動に関して尋ねると、Aはこれまでの生活を振り返り不満を訴える。大学祭に誘うとAは断った。
13日後	大学祭に行く。今まで病院に慣れようと言いつけてきた。40代でも大丈夫？		看護者が体験や選択肢を増やす目的で大学祭に誘うとAはうつむいたが、自己決定できた。また何も知らない自分を振り返りまだ遅くないかと尋ねてきた。
24日後	考えずにすむ日々はおかしい。市立図書館か文化公園に行きたい	初めて大学祭に参加。警備（見回り）をおこなう	責任をもつことが発達段階から必要と判断した看護者はAの名前の入った連絡網を渡し一緒に見回りをした。Aは役割を終えると今後の希望を初めて言った。
28日後 場面1	…働きだして何年ですか？嫌なことはどうやって乗り越えるんですか？		働くことに関心を示すAの初めての質問に、看護者は知識と体験が必要と判断した。看護者の体験と事業所のあり方を伝えたとAはその実情を知らなかった。
35日後 場面2	労働…僕は何ができるかな？	市立図書館を初めて散策	Aは就労をイメージできないため、同じ精神障害者の働く姿を見せる必要があると思い提案すると、Aは行くと言った。
49日後 場面3	親の面倒をみないといけない。	十何年ぶりに2回目のお墓参り	金銭面で父親と口論になったことを知っていた看護者は、労働を意識付けする機会と判断し伝えたと、Aは事業所に行ってみたいと言ってきた。
<p>63,64日後、デイケアでのカンファレンスを行う。デイケア責任者は「これまで、Aは自分のペースでいたけど、今後のことを考えるようになって、変わってきている。今まで促したりすると興奮することがあったが、今はそれが無い。」や、心理療法士は「例えば、靴をうまく履けない子供にちょっと手を差し出すとうまく行えるように、今変化があるので少し後押しするような関わりが必要になるのでは。」、担当医師からは「内服で調整しながら様子を見るので関わりを進めてください」など、スタッフ間で患者の変化している状況を共有し、関わりの方角性「Aが、本来の40代男性に近づくように、実社会においてできることの選択肢の幅を広げて、積極的に体験を積み重ねて自分の生活に自信を持つことができる。」について確認する。</p>			
担当後	Aの言葉の変化	Aの行動の変化	看護者との関わり
84日後	就労事業所のテレビを見た。今まで素通りだった。今は見たくなる。	就労支援事業所のテレビ番組を見る	Aは福祉の番組への関心と実際に見た番組について語った。実感していくしかないことを伝えたと「うん、あなたと話すようになって働くことが気になってる。」と言う。
105日後	一般的な人の幸せを体験したい	一般のカラオケ店に行く	Aが病院以外のカラオケを希望した。理由を尋ねると一般人の幸せを体験したいと表現した。
113日後	緊張した。初体験だから来ただけでも意味がある。	周りをキョロキョロしながら一緒に食事をする。	就労継続支援A型事業所（レストラン）で、同じ障害を持ちながら働く障がい者を観察しながら一緒に昼食をとる。
132日後	皆楽しそうだった。あれなら毎日行きたくなるだろうな。		就労継続支援B型事業所を一緒に見学し、そこの所長と、Aと似た精神症状だったと言われる事業所の利用者から話を聞いた。

その後、スタッフから園芸のプログラムに誘われて手伝ったり、デイケアのホール内で離れたところからプログラムに参加する等の姿が見られることもあった。

表2 場面1（関わり28日後）

Aの希望で市立図書館に行く予定でいたが、訪問看護の日と重なったので市立図書館は延期となった。訪問看護まで時間があるということでA氏の提案で公園に行った場面

利用者の言動・状況	看護師の認識	看護者の言動
1) キャッチボールをする。	2) 大学祭の直後に考えないですむ日々はおかしいと言っていた。その当たり前の思いを強化したい。今後の夢の原動力になるかもしれない。もう一度思い描かせてみよう。	3) 「大学祭行けて、自分から市立図書館とか行きたいと言ったよね。自分で今はどう思う？」
4) 「そうだね、今まで何も考えてこなかったから、大学祭に行けたこと自分でも驚いてる。だって今までは病院で過ごせば困らないで済むと思ってたからね。」	5) うん、うん、社会生活では困ることの連続。人間は考えながら生活力を身につける。困らないってやっぱりおかしい。	6) 「困らないって変だね。」
7) 「うん、そう思った。」キャッチボールをやめて首をかしげる。	8) いい感じ。この人の持てる力は、刺激をすれば疑問をもてるところ。何か考えてる。困らないことに疑問をもててる。	9) 「それを自分で気づけたんだからそこが凄いことだね。変化を自分から求めたしね。」
10) 「そう言ってくれると嬉しいな。」看護者を見る。	11) 体験がないから自信もつけようがないな。自分で将来に向けて頭を働かせてほしい。	12) 「さて、これからどうしようかね。」
13) 「…質問していい？」	14) ん？なんだろう。	15) 「いいですよ。」
16) 「聞きたいことがあって…働いて何年ですか？」	17) え？就労について関心がある？チャンスだ。一応その思いを確認しよう	18) 「10年以上だけど。どうして？」
19) 「この前、嫌な事がたくさんあるって言ったよね。」	20) 言った。仕事でうまくいかなかったり、人間関係だったり。Aさんなんか元気がなくなった感じだけど。	21) 「言ったね。研究とか人間関係でイライラするって。なんで？元気がないですね。」
22) 「そんな時どうやって乗り越えるのかな？と思って。」	23) どうやって乗り越えるか？人間は問題を乗り越えながら生きる。働くときもたくさん問題に直面する。問題のない人生なんてない。今までうまく乗り越えられなかったんだらう。乗り越える力をつける考え方の訓練が必要だ、そうやって人は育まれるし、これから育んでほしい。まずは自分の具体を伝えてみよう。	24) 「凄く大事。例えば、僕の場合大学だけではない。病院にも来る。外部の人間。困ることは周りと思慮疎通や関係性が難しいこと。でも一人でもいいから共有できそうな人を作る。今のデイケア師長。僕一人で解決できない自信がない確かめたいときは相談する。そうやって乗り越える。」
25) 「相談するの？」	26) 一人でできることは少ない。当然。	27) 「一人では何もできない、僕は。」
28) 黙る。下を向く。	29) 凄く真剣に考えてる。就労経験は？	30) 「働いた体験は？」
31) 「全くない。昔家庭教師を1か月したけど、働いたうちに入らないもんね」	32) 社会に出る前には発症の兆候がある。まともに社会に出ていない。体験が乏しすぎる。でも家庭教師をしたことも事実。何が出来る？	33) 「そうか。あまりに体験が乏しいな一。Aさんは何ができそう？」
34) 「何だろうね…」うつむく。「そうだ。作業するところがあるんでしょ？」	35) お、自分から作業の話をしてきた。いい感じ。見たり聞いたりという体験は？	36) 「あるね。見た事は？」
37) 「見た事はない。聞いた事はある。」	38) 聞いただけではイメージは広がらない。分からないから不安にもなる。見たらまた何かしら実感するだろうから今後検討しよう。	39) 「そうですか。聞いただけではよくわからないよね。」
40) 「うん」	41) ちょうど今自分が書いたレポートがあるから見せてみようかな。働くってこういうことみたい。どう思うだろう。	42) 「そうだ。そういえば鞆に僕のレポートがあるんですよ。ちょっと見てくれない。」
43) 「え？レポート？」	44) 一つのことを仕上げるのに一つ一つ積み重ねることが必要なことを言ってみよう。やる気なくすかな？でもどう感じるかは本人次第。	45) レポートをめくる。「仕上げるのに2年、でもこれは努力の証です。何もやらなければ前には進まない。やったからといって報われるわけでもない。だけど、やらなければ絶対報われない。」
46) 「あ～そうだね。こうやって皆がんばってるんだね。」小さく何度も頷く。	47) 気落ちしたかな。大学祭に行けた事は凄く大きなことだから伝えておこう。	48) 「大丈夫？でも大学祭には行けて、さらに一緒にパトロールしたんだよ。凄いことじゃない。できることあったじゃない。」
49) 「あっそうだね。凄く参考になった。ありがとう。」笑顔	50) まだまだ行動に移すなんてことはできないだろうけど、心は動いている印象。これからもっと就労に目が向くような刺激をしよう。	

続けて、「働いて何年ですか？」や「嫌なことをどう乗り越えるのかな？」と質問を受けた看護師は、将来を意識して問題に直面したときにどう乗り越えるかを考える力をつけてほしいと、一般的な乗り越え方を伝えると、Aは黙って下を向いてしまった。そこで、看護師が就労の経験を尋ねると、Aは経験の少ない自分自身に目を向け始めた。看護師は、短期間でも経験があることを大事にしようと、何ができそうか尋ねると、Aは作業所について自ら質問するが具体的なイメージがない事がわかった。看護師が、働くことについてイメージできるようにと、看護師自身の成果物を見せた時のAの様子から気落ちさせてしまったと感じ、A自身が大学祭で手伝ってくれたことを評価すると、Aは笑顔になった。看護師は、心が動いていると捉え、今後、就労に目が向くように関わろうと考えた。

つまり、場面1は、これまでの生き方についてそのままではおかしいというAの思いを強化しようと考えた看護師が、自己を振り返るのも、Aのもてる力であると考えて刺激すると、Aは働くことや嫌な事を乗り越えるあり方に関心を示した。そこで、Aが自ら実行した活動を改めて自覚できるよう認め、共にその変化を喜ぶことができた、という場面である。

この場面から、看護師の認識と表現の特徴として、
＜前回の関わりを想起し、考えないですむ生活は普通ではないという感覚を意識してほしいと考えている。＞、
＜何か考え始めたり疑問をもったりする様子を良い反応と捉えて評価し、嬉しい思いを引きだしている。＞、
＜嬉しい思いを引き出したあとに、将来へと対象の目が向くように意識している。＞、
＜体験の乏しさから経験したことのある部分に目を向け、何ができそうか考えてもらっている。＞、
＜利用者が体験したことのある小さな成果を評価して、自信をつけてもらおうとしている。＞、
をとりだした。

2) 場面2の分析過程

Aが他国の精神科医療に関心を向けたので、看護師が日本の精神科医療と比較しながら関わったところ、Aが働くことに関して考え始めた場面2について述

べる。この関わりを表3に示した。

大学祭のとき初めて、図書館に行きたいと希望し、図書館では趣味の写真を撮ることを優先していたAであったが、看護師は、行きたいところに行くだけで終わってほしくないと思った。そこには就労支援事業所が付属していたので、それをあらかじめ知っていた看護師は、Aが自分と似た状況で働いている障がい者を見て振り返ったり、働くイメージや、社会資源を知りたいと思ってほしいとの願いから、就労支援事業所について説明した。ところが、期待していたほどの反応は得られなかったので、Aが何に関心を示すのか観察した。すると、精神障がい者に関する他国の映画に関心を示したので、就労も考えるきっかけになると思った看護師が、その映画を話題にすると、Aは反応した。日本の精神科医療の現状は、世界と比較すると普通ではないことを伝えると、Aは目を見開いたので、「いつか日本もなくなるかもしれない」と投げかけると、「なくなるの？」と大きく反応した。看護師は、危機感を感じていると思い、Aの年齢を考えながら、働くことについて尋ねてみたところ、Aは「何ができるのかな？」と困った表情をして考えていた。看護師は、Aの生活過程の特徴から、考えが浮かばないのも仕方ないけれども、考え始めているところを“良し”と思った。さらに、発達段階を意識してほしいと思った看護師は、本来の発達段階のあり方を投げかけると、Aは下を向いた。看護師は、働くことをイメージするためには体験が必要と考え、就労支援事業所に行こうと誘ったところ、Aは「行ってみる」と言った。

つまり、場面2は、Aの希望を引きだし地域施設に出かけた。Aの関心に沿っていくと、他国の精神科医療について知っていることがわかったので、看護師は、日本の現状や、予測した今後の状況をAにぶつけてみると、心が揺れ始めた。Aは自分の今後のあり方を考え始めたので、就労支援事業所に誘うと行く気を見せた場面である。

この場面から、看護師の認識と表現の特徴として、
＜希望に沿って目的地に行くだけではなく、事前に

表3 場面2（関わり35日後）

大学祭が終わったときに行きたいと言えた市立図書館での場面。

利用者の言動・状況	看護師の認識	看護者の言動
1) 市立図書館に到着し図書館の中に入らず文化ホールや建物の写真を撮る。	2) 行きたいと言えたところに来られたのは良いけど、それで達成できただけではもったいない。ここには就労継続支援A型事業所（喫茶店）がある。同様に菓を飲んで働く障がい者の姿から自分を見つめてほしい。働くイメージと資源を知りたいという思いになって！	3) 写真を一通り撮り終えた頃「あれ何か知ってます？」喫茶店を指差す。
4) 店の文字を見る。「あれ、何か聞いた事あるような…」	5) Aさんのデイケアにポスターが貼ってあるから知ってる？	6) 「知ってる？」
7) 「え？なんだろう？」	8) 就労に関心が薄いから目に留まらなかったかな？	9) 「あれは〇〇という喫茶店で、抗精神病薬を飲みながら働く人たちがいる飲食店ですよ」
10) 「あー、そうか。」	11) あれ？反応薄いな。関心ない？というより聞きたくない？少し様子を見よう。	12) 反応をみている。
13) 文化ホールの掲示板に目をうつす。	14) あれ！精神障害者の開放について話題となっているイタリア映画のポスターだ、チャンス。自分から見たものだから何か関心があるかもしれない。この媒体をきっかけに就労への関心が広がってほしい！	15) 「今度ここでイタリアの精神病院の実話をもとに作った映画が上映されるんですよ。」
16) 「ふ～ん、イタリアは精神病院がないって聞いたことあるけど、なんでかな？」	17) イタリアの実情を知っている？病院がないという知識とイメージ・A自身が病院施設にお世話になっている事実・日本とイタリアとの比較などが問いを抱かせているかもしれない。自分に関係すること。たとえ何らかの病気を持っていたとしても人間はよく働かせるようにうまくつくられていることを知ってほしい。	18) 「日本は過保護なのかもしれないです。イタリアとかは働ける可能性があるなら働こうという前提があるだけのことかな。世界に比べたら日本は精神病院が多いし普通ではないですよ。」
19) 「え？そうなの？」目を見開く。	20) 相当驚いている。危機感を持ってほしい。	21) 「いつか日本もなくなるかもよ。」
22) 「え？なくなるの？なくならないでしょ？」	23) うわ、心配そうな顔。今までそういう危機感とはなかっただろう。本来家庭と社会で活躍する発達段階。病院で落ち着いて生活するにはまだ早い年齢。働くというキーワードに対してAはどう考えるかな？	24) 「すぐにはなくならないです。先のことは分からない。だから何かやれることが大事。Aさんは何か働いてみたいことありますか？」
25) 「労働か～、僕は何ができるのかなー。…何も思いつかない。」困った表情。	26) よし、考え始めた。発症は社会に出る前・10年以上病院での生活が中心。思い浮かばないのも無理はない。でも発達段階のどの時期かは意識してほしい。	27) 「そうか～、本当だったら働いて責任のある年齢なんですけどね。」
28) 「…うん。そうだね。」やや下を向く。	29) いきなり労働の話はきつかったかな？でもまだ40代前半。まだ余暇を楽しむという発達段階ではない。稼ぐ思いが大事。まずは働くイメージを描かせる体験が必要。似た状態にある精神障がい者の働く姿を見ることから始める必要がある。事業所に誘ってみよう。	30) 「よし、あの喫茶店行ってみようか。一度行ってみないと分からないですよ。」
31) 「…う…ん、行く、行ってみよう。」		

この場面後、一緒に喫茶店のメニューを見に行った。

知っているその場の情報を意図的に活用している。＞、＜利用者が関心を向けたものをすかさず捉えて、話題を切り替え、看護者の意図に沿う方向で考えてもらおうとしている。＞、＜生活過程をふまえたうえで、利用者自身が、将来できそうなことを思い浮かべられないようでも、考え始めたこと自体を“良し”と判断している。＞、＜利用者が今後の自分のことを

考え始めた様子をみて、本来の発達段階のあり方について、看護者が思ったことを伝えて、利用者の思いを揺さぶっている。＞、＜利用者自身が驚いたり危機感をもったりするなど、思いを大きく動かし、あと、利用者に働くことについて考えてもらっている。＞、＜利用者が現実を直視していることを、看護者が意識して、利用者の思いが動いたあとで一

表4 場面3（関わり49日後）

関わり始めた頃、A氏が入院したとき母親が亡くなって10年以上経つが一度も墓参りに行っていない、ということがわかった。墓参りに誘うと、「亡くなるまでうまくいかないままだったから、後悔しているけど、今更行っても何で来たんだとか思われないかな？」と言うので、そういう思いで過ごしてきたんだと思い、一般的に墓参りはどうするか尋ねると、「手を合わせる、あ～謝るといいのかな？」と答えた。それを聞いた看護師は自然な気持ちだと思い、それで良いのでは？と返すとAは「そうなんだ、わかった、行こう」と言った。約1カ月後、Aから墓参りの件で言ってきたので、看護師は長男であることの自覚や家族に変化を感じとってほしい思いから一緒に初めて墓参りに行った場面。

利用者の言動・状況	看護師の認識	看護師の言動
1) 墓参りでは、墓の拭き掃除や線香をあげ手を合わせていた。その後車に乗る。	2)この前、今更何で来たんだと思われないとか、謝るとか言っていたけど、どんな気持ちだったのかな。	3)「何を思いながら手を合わせましたか？」
4)「ご無沙汰をしています、会いにきましたって、心の中で唱えました。」涙を浮かべる。	5)気持ちが揺れてる、いいぞ。何年も後悔した思いで過ごしていたのだから。少しでも家族への思いが動いて出てきてほしいな。	6)「そうか。」
7) 無言でいる。	8) 静かだな、初めてだから色々考えることがあるだろう。今まで行かなかったのが不思議なくらい。家族に何かして上げたいという気持ちになるといいなあ。どういう気持ちだろう？	9)「線香あげてどういう気持ちですか？」
10)「お母さん喜んでくれるかな？」	11) 長男だし息子だから喜ぶよな。	12)「一人息子が来たらそりゃ喜ぶですよ。」
13)「喜んでくれるよね。母とは生前よく喧嘩してばかりだったから。」	14) そうだったな。あまり母親のことが好きじゃなかったみたいなこと言っていた。でも嫌な思い出ばかりじゃないとおもうけど…	15)「親とは喧嘩してもおかしくないですよ。思い出はそんなことばかりでもないでしょ？」
16)「そうだよね、そういえば死ぬ前くらいは僕が意見を言っても聞いてくれるようになっていたな。最後だったからかな。喜んでくれるといいな。」と涙ぐむ。	17) 感情が動いている。家族との関係はやはり大事。喧嘩が悪いものと思っているけど、必ずしもそうではないことを伝えよう。	18)「僕は今でも親と喧嘩することありますよ。お互い主張するからね。でもそれでもいいと思う。でないと思いが伝わらないから。」
19)「…そうだね。…表現することが大事だね。」	20) 父親との関係はどうなんだろう。あまり他者との交流がないから周りの人が家族とどう関わっているかなんて知らないだろう。家族との関わりについて一例として自分のことを話そう。	21)「僕は親孝行もできていないかもしれないけど。」
22)「親孝行か。高校と大学はストレートで行ったからそこまでは親孝行したと思うけど、その後できていない。本当なら働いているわけだけど、働けていないし。」	23) 自分から働くという言葉が出た。チャンス！本来なら働いている発達段階だと本人もわかっている。そういえば、お金を使いすぎることと障害年金を管理する父親と口論になったと聞いた。稼ぐことができれば、親孝行できるから、働く意識付けになる。もう少し自分が親にやっていることを伝えてみよう。Aと家族が関わるイメージの助けになるかな。	24)「僕なんか、せいぜい誕生日や父の日に焼酎を買って渡すことくらいしかやっていないかな。働いているのにね。どう思う？」
25)「そうか、僕の父親はビールが好きだからビールを買って渡すでもいいのかな？それにビールと一緒に飲めたらいいな。」	26) よし！家族との関係が相当悪いみたいだけど、家族との交流を想像している。本来なら家族を支える年齢。そういう気持ちがあったなんて嬉しい。目標にもなりそう。	27)「凄い。今後の目標ができましたね。それを目指して何かやって働いていけたらいいですね。そういう親孝行もできるといいですね。そういう言葉がAさんから聞けて嬉しくなった。」
28) 笑顔で「そう、親孝行か。本当は親の面倒をみないといけないんだもんね。」	29) 分かっているな。この気持ちもっと引き出して上げたい。	30)「その通りです。いつか面倒みて上げてくださいね。」

この場面の後、Aが今度事業所に行きたいと言ってきたので理由を尋ねると、親の話をしたことで就労について考えていたら、以前デイケアに通っていた利用者さんがそこで働いていると思い出したとのことだった。看護師は、同じように抗精神病薬を内服しながら働く知り合いの人を見て刺激になると考えた。

緒に行動することを伝えている。＞、をとりだした。

3) 場面3の分析過程

墓参りをきっかけに、親孝行について考え始めたAが、父親との関係を想像し、A自身の役割につい

て表現できた場面3の分析過程について述べる。この関わりを表4に示す。

約1ヶ月前の関わりで「母親が亡くなるまでうまくいかないままだった。後悔している。」という家

族に対する思いを引きだしていた看護者は、家族に対してどういう思いでいたのか確認すると、Aは思いを流涙しながら表現した。墓参り前の関わりで「10年以上墓参りしていないこと」や「後悔しているけど今更行っても」と諦めていた思いが、墓参りによって流を涙すほどに感情を動かすという変化に至ったことから、看護者は良い反応と捉え見守った。

看護者は、家族に何かしてあげたい思いが働いてほしいと願い、墓参りしたときの思いを振り返ってもらうと、「喧嘩ばかりしていた」という母親との思い出を語った。看護者は、嫌な思い出以外の記憶もあるはずと思いそれを伝えると、Aは「そういえば…」と思ひだし感情が再び動いた。Aが「喧嘩は悪いもの」という捉え方をしているので、看護者は「僕は今でも親と喧嘩する。お互い主張する。」と伝えたとこ、Aは母の思いを考えた。家族との良い思い出に注目した看護者が、そのことを意図的に話題にすることで、Aの感情が再び動いた。

次に、父親との関係が気になった看護者が、看護者自身の父親との関係について伝えると、Aは「高校・大学は親孝行できた」過去と現在の「できていない自分」に目が向いた。看護者は、何気ない日常的なことで良い例として、自分の父親に対する関わりを伝えると、Aは現実的にできるような父親との交流する様子を表現したので、看護者はうれしくなった思いを伝えた。Aは両親との関係において、後悔の念やうまくいっていない思いでいたが、「本当は親の面倒をみないといけな」と現実的な内容を表現し、就労支援事業所に行きたいと言ってきた。

つまり場面3は、母親との関係に後悔の念をもっていたAが初めて墓参りをする事ができた。家族との良い思い出もあるはずだと問いかけると、Aは思ひだし心が動いた。そこで、父親との関係もと考えた看護者が、自身の家族に対する親孝行の例を話すと、Aは現実的なイメージを表現し、自分が親の面倒をみなければと言った。その後、就労支援事業所に行きたいと申し出てきた場面である。

この場面から、看護者の認識と表現の特徴として、

＜以前の関わりで引きだした家族の思いをもっと引きだしたいと考えている。＞、＜表現された感情を見て、心が動いて良い反応と捉え見守っている。＞、＜家族と向き合えるように心が動いてほしいと思いながら、どういう思いが湧いているか引きだそうとしている。＞、＜喧嘩は悪いものという考え方を、看護者の家族関係を例に必要なものとしてイメージしてもらおうとしている。＞、＜家族に何もできていない自分に向き合ってしまったので、看護者の子供としての親に対する些細な関わりを伝えてイメージしてもらおうとしている。＞、＜家族との交流を現実的にイメージしたことに、看護者のうれしい思いが湧きあがり、感じたその思いをそのまま伝えている。＞、をとりだした。

3. 利用者が同世代の社会生活のあり方を意識できるようになるときの看護の視点

場面1から場面3の看護者の認識と表現の特徴から、同世代の社会生活のあり方を利用者が意識できるようになるときの看護の視点をとりだす。その分析結果を表5に示す。

まず、場面1で＜考えないですむ生活は普通ではないという感覚を意識してほしいと考え＞は、Aの反応を捉えながら評価し認めている。看護者はAの反応を認めたうえで、＜将来に目が向くように意識し＞、＜体験の乏しさから経験したことのある部分に目を向け、何ができそうか考えてもらう＞。同様に、場面2では、＜事前に知っているその場の情報を意図的に活用している＞、＜話題を切り替え、看護者の意図に沿う方向で考えてもらおうとしている＞、＜今後の自分のことを考え始めた様子をみて、本来の発達段階のあり方について、看護者が思ったことを伝えて、利用者の思いを揺さぶっている＞、＜利用者が現実を直視していることを、看護者が意識して、利用者の思いが動いたあとで一緒に行動することを伝えている＞と、思いを揺さぶりながら、今後の社会生活に目を向けてもらおうと働きかけている。また、場面3では、看護者がAの母親に対する後悔の念を引

き出し、〈家族の思いをもっと引きだしたい〉と考え、家族と向き合えるように心が動いてほしいと願いくどういふ思いが湧いているか引きだそうとしている。〉。そして、Aの揺れる感情の動きを見守りながら、〈家族に何もできていない自分に向き合ってしまったので、看護者の子供としての親に対する些細な関わりを伝えてイメージしてもらおうとしている。〉と、これからの家族関係に目を向けてもらおうとしている。つまり、《利用者が、これまでの生活のままではいけなと振り返っていることを認めたうえで、今後の生き方に目を向けてもらえるように働きかけていく》と、とりだした。

次に、場面1で、成人期にある男性として自分で気づけていることや変化を求めている様子を評価し、〈考えないですむ生活は普通ではないという感覚〉、〈嬉しい思いを引き出したあとに、将来に目が向くように意識〉、〈何か考え始めたり疑問をもったりする様子を良い反応と捉えて評価〉をとりだした。場面2では、〈利用者自身が驚いたり危機感をもったりするなど、思いを大きく動かし〉、〈将来できそうなことが思い浮かばなくても、考え始めたことを“良し”と判断〉、をとりだした。場面3では、〈表現された感情を見て、心が動いて良い反応と捉え〉、〈家族との交流を現実的にイメージしたことに、看護者のうれしい思いが湧きあがり〉と、とりだした。これら看護者の認識と表現の特徴は、自分の思いをうまく表現せずに生活を送ってきたAが、成人として社会生活を送る過程で必要な感情の動きや考え方へ変化しているので、利用者の反応をよい変化と捉えている。つまり、《[成人の生き方や働き方に関心を向ける][自分に何ができるか考える][自分の知らないことに驚く][自分の今後のあり方に危機感を抱く][家族との思い出に感情が動く][自分からやりたいことを表出する]という利用者の反応をよい変化と捉える》と、とりだした。

次に、場面1で、看護者が、働くことのイメージを広げるために、A本人が大学祭で実行できた成果で評価し、今後就労に目が向くように心を刺激して

いこうと考えていることから、〈利用者が体験したことのある小さな成果を評価して自信をつけようとしている。〉と、とりだした。他の場面では、場面2で〈生活過程をふまえたうえで、将来できそうなことが思い浮かばなくても、考え始めたことを“良し”と判断している。〉や、場面3で〈家族との交流を現実的にイメージしたことに、うれしい思いが湧きあがり、感じたその思いをそのまま伝えている。〉ととりだし、成功体験に目を向けさせたのは場面1のみであった。つまり、《自らできたことや考えたことを認めて、成功体験に目を向けてもらう》と、とりだした。

最後に、場面3の〈喧嘩は悪いものという考え方を、看護者の家族関係を例に必要なものとしてイメージしてもらおうとしている。〉、〈家族に何もできていない自分に向き合ってしまったので、看護者の子供としての親に対する些細な関わりを伝えてイメージしてもらおうとしている。〉は、家族との生活過程と成人として働きながら一般的に家族のなかで役割をもつことの意味を、看護者の具体例をだして伝えている。つまり、《家族とうまく向き合えていない体験が語られたら、一般的な家族内での役割を、具体例を交えながら今後のイメージがわくようにする》と、とりだした。

以上より、看護の視点として、①《利用者がこれまでの生活のままではいけなと振り返っていることを認めたうえで、今後の生き方に目を向けてもらえるように働きかけていく》、②《[成人の生き方や働き方に関心を向ける][自分に何ができるか考える][自分の知らないことに驚く][自分の今後のあり方に危機感を抱く][家族との思い出に感情が動く][自分からやりたいことを表出する]という利用者の反応をよい変化と捉える》、③《自らできたことや考えたことを認めて、成功体験に目を向けてもらう》、④《家族とうまく向き合えていない体験が語られたら、一般的な家族内での役割を、具体例を交えながら今後のイメージがわくようにする》の4項目が抽出された。

表5 分析結果

利用者が同世代の社会生活のあり方を意識できるようになるときの看護の視点

	4つの看護の視点	3場面の看護者の認識と表現の特徴（キーセンテンス）
1	利用者がこれまでの生活のままではいけなと振り返っていることを認め たうえで、今後の生き方に目を向けてもらえるように働きかけていく	<ul style="list-style-type: none"> ・考えないですむ生活は普通ではないという感覚を意識してほしい（場面1） ・将来へと対象の目が向くように意識（場面1） ・体験の乏しさから経験したことのある部分に目を向け、何ができそうか考えてもらおう（場面1） ・事前に知っているその場の情報を意図的に活用している（場面2） ・話題を切り替え、看護者の意図に沿う方向で考えてもらおうとしている（場面2） ・今後の自分のことを考え始めた様子をみて、本来の発達段階のあり方について、看護者が思ったことを伝えて、利用者の思いを揺さぶっている（場面2） ・利用者が現実を直視していることを、看護者が意識して、利用者の思いが動いたあとで一緒に行動することを伝えている。（場面2） ・家族の思いをもっと引きだしたい（場面3） ・どういう思いが湧いているか引きだそうとしている（場面3） ・家族に何もできていない自分に向き合ってしまったので、看護者の子供としての親に対する些細な関わりを伝えてイメージしてもらおうとしている。（場面3）
2	[成人の生き方や働き方に関心を向ける][自分に何ができるか考える][自分の知らないことに驚く][自分の今後のあり方に危機感を抱く][家族との思い出に感情が動く][自分からやりたいことを表出する]という利用者の反応をよい変化と捉える	<ul style="list-style-type: none"> ・考えないですむ生活は普通ではないという感覚（場面1） ・嬉しい思いを引き出したあとに、将来へと対象の目が向くように意識（場面1） ・何か考え始めたり疑問をもったりする様子を良い反応と捉えて評価（場面1） ・利用者自身が驚いたり危機感をもちたりするなど、思いを大きく動かし（場面2） ・将来できそうなことを思い浮かべられないようでも、考え始めたこと自体を“良し”と判断（場面2） ・表現された感情を見て、心が動いて良い反応と捉える（場面3） ・家族との交流を現実的にイメージしたことに、うれしい思いが湧きあがる（場面3）
3	自らできたことや考えたことを認めて、成功体験に目を向けてもらう	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者が体験したことのある小さな成果を評価して、自信をつけてもらおうとしている（場面1） ・生活過程をふまえたうえで、利用者自身が、将来できそうなことを思い浮かべられないようでも、考え始めたこと自体を“良し”と判断（場面2） ・家族との交流を現実的にイメージしたことに、うれしい思いが湧きあがり、感じたその思いをそのまま伝えている（場面3）
4	家族とうまく向き合えていない体験が語られたら、一般的な家族内での役割を、具体例を交えながら今後のイメージがわくようにする	<ul style="list-style-type: none"> ・喧嘩は悪いものという考え方を、看護者の家族関係を例に必要なものとしてイメージしてもらおう（場面3） ・家族に何もできていない自分に向き合ってしまったので、看護者の子供としての親に対する些細な関わりを伝えてイメージしてもらおうとしている（場面3）

IV. 考察

以上に述べた実践過程の分析から、長期に渡って精神科デイケアから離れた場所で過ごす統合失調症の利用者が、利用者と同世代の社会生活のあり方を意識できるように促していく過程での、看護者の視点、4項目が得られた。それら4項目について以下、考察する。

1. 利用者のこれまでの生活の思いを認めたくて、今後の生き方に目がいくような働きかけ

今回のAのように、長年プログラムには参加せずに経過をたどる精神障がい者は多く存在する。「在籍期間が長くなるにしたがって他の環境への適応能力が低下し、本来の目的に反して社会参加の可能性が減ってしまう。」⁷⁾とされているので、すでにデイケアに6年在籍しているAは、年齢的なことも加味すると、社会参加に向けた生活のあり方について考えていかなければならない。そのようなAが、大学祭に行ったことをきっかけに、これまでの生活に疑問を抱き、首をかしげる反応を、看護者は“疑問を持てる、これがAの力”と認め、Aは自分自身を見つめる機会となっている。向谷地が「何が自分の困難や生きづらさにつながっているかを整理し明らかにしていくことは、その後の当事者の生活やリカバリーの質にも直結する大事な要素である。」⁸⁾と述べているように、セルフマネジメントを当事者自身がおこなったり認識したりすることに意味があると考えます。つまり、利用者自身の生活の質に対する気づきが必要になるので、利用者自身が一般的な人間の発達段階について考えられるように、支援者は利用者と一緒にこれまでの生活過程を振り返ってみたり、客観視を促したりする刺激を意識しておくことは重要な視点と考える。

2. 社会生活への自立を促すための利用者の反応の捉え方

看護者が、各場面においてAの反応に対し、“Aのもてる力”“良い反応”と感じ取っていることが共通した認識と表現の特徴であるととりだされた。

これは、Aが落胆したり、驚いたり、涙を浮かべ親とビールを飲み交わす姿をイメージしたりする表現に、看護者が健康的な認識の働きかけ方として捉えている。そもそも認識には、五感覚器官を働かせながら「その人の今までの生活の仕方の中でつくられる」⁹⁾という特徴があり、その人の生活過程の中に、その人の感じ方、考え方の謎を解く手掛かりにもなる¹⁰⁾。Aは「病院で過ごせば困らないですむ」という考え方をしており、何か行おうとする意志を押さえつけてきた生活過程があったと予測できる。海保が「意志とは自らが主体的に描いた目標像に向かって、それを現実化すべく実践へとおもむかせる能動的認識」¹¹⁾と述べ、薄井が「生活環境の拡大に応じて情→知→意→他者との関係における自己の客観視、というパターンの繰り返しが終生ついてまわる」¹²⁾と述べているように、意志がうまく働くように情を刺激したり、知を満たすような支援を意識することは、障がいの主体性を育み自立を進めるためには必要なことと考える。

また、「人間とは現実世界に合わせて認識を発展させていくものであるから、自分の小さな頭で世界を見ることで満足していると、人間は発展しない」¹³⁾のである。看護者は、利用者がどういう思いで生活を送っているのか予測しながら関わるが、今持っている情報だけで満足してしまうと、利用者の本来もっている力の限界を決めてしまい、支援する側主導になってしまいかねないと思う。他職種の人が観察した事実をさらに共有することで、支援する側の認識も発展的に膨らみ、より利用者の認識に近づくことができるといえる。よって、利用者が主体的に社会生活へ向けて自立していくことを看護者が支援するためには、多角的に事実の共有を図っていきながら、社会でうまく生活している利用者のイメージを立体的に描いていくことが必要であると考えます。

3. 自らできたことや考えたことを認め、成功体験に目を向けられるような働きかけ

「人間は人間社会のなかで生活しているため、意識的にしろ無意識的にしろ社会の影響を受けて行動する」¹⁴⁾ ことになるので、どのような社会で生活を送ってきたかによって認識のあり方も異なってくる。今の精神科医療は、利用者のストレスのかかる状況を避けるように先回りしたり、利用者が困らないように管理したりする関わりが多くみられる。看護師は、利用者自身が自分の生活や将来について考えたり、判断において自ら選択したり、選択した内容を自ら決めたりするという、主体的なあり方について考慮する意識が低かったように思う。人間は生きている限り脳細胞を働かせ続けるので、大いに困ったり、うまく生活していくための選択肢を増やしながら、生活の質をよりよいものにしていくために考える力を鍛えることが重要であるといえる。つまり、どのような内容であれ、利用者が考えられていることをその人の力として認めていき、小さな成功体験と一緒に喜び合ったり、評価したりする積み重ねが、利用者の自信につながると考える。これは、チャールズ・A・ラップが述べる「大切なのはクライアントがその問題点や欠点ばかりでなく、それ以外の面にむけるように促していくことである。」¹⁵⁾ と重なる。Aが就労に関心を見せたとき、A自身の小さな体験での成功を喜ぶと、Aはよい反応を示した。自立の機会を逃してきた精神障がい者は、体験の乏しさによってやりたいことを一気に思い描くことは難しい。池淵が、「当事者の主体の中でのリハビリが生まれるといっても、当初から本人に何か目標があるわけではないし、むしろ挫折感と絶望に打ちひしがれていたり、願望の中に逃避してしまっていることも多い。」¹⁶⁾ と述べているように、障がい者は、体験の乏しさだけではなく、挫折や絶望感で自立への強い抵抗を感じている。しかし、支援者側が、小さな成功体験は日常生活の中のいたるところにあるという視点をもっていれば、喜びを共有するチャンスを逃すことなく捉え、利用者が少しでも将来に向けて

認識が働くように促すことができるのではないかと考える。

4. 一般的な家族内での役割を、イメージできるような働きかけ

Aは長い間、施設周辺を一人で過ごすことが多かったことで、一般社会においてうまく生活するだけの知恵となるような情報が、極端に少ない中で生活してきたと思われる。社会的自立を果たす前に統合失調症を発症し、長期間施設中心の生活という状況は、社会経験を狭めて社会生活をうまく送ることが困難になる。利用者が本来の社会環境で生活を送るためには、細かな日常生活の仕組みや家族も含めた人間関係のあり方を、実際の人間と人間の関わりを通して学ぶ訓練が必要である。場面3では、何もできていない今の自分に目が向いてしまったが、Aの表現した“働く”というキーワードから、40代本来のあり方である家庭と仕事の役割を関連付け、看護師自身の親との関わりを例に示すと、Aも家族との関わりをイメージすることができた。坂本は、「Banduraは、自己効力感の源泉のひとつとして身近なモデルの存在を上げているが、リハビリの希望を感じていくうえでもモデルの存在は大きい。」¹⁷⁾ と述べている。つまり、利用者の社会生活の実現に向かっていくためには、利用者が今後の生活についてより具体的にイメージできるように、看護師が利用者にとって鏡となることを意識することが重要になると考える。

V. おわりに

長期に渡って精神科デイケアに在籍しプログラムをうまく活用できない統合失調症の利用者の看護実践を通して、看護師がどのような視点をもって関われば、利用者自身が同世代の社会生活のあり方について意識できるようになり、次に目指すべきことを描くようになるのかについて、示唆を得ることができた。

長期間デイケアに在籍する利用者の中には、施設

以外のところでどのようにして社会生活を送れば良いのか分からなかったり、自信がなかったりと、様々な理由から、すでに社会生活に対してあきらめの思いを抱いていることが多い。利用者が、自ら希望や将来のプランを言えれば良いが、それらさえ口にできない利用者もいる。そのような表現できない利用者に対する支援を、今後も検討していかなければならない。

近年、リカバリー概念が広がり、多くのプログラムが海外から導入され、その効果について検証されてきている。これまでの、管理が主体であった「医学モデル」から、利用者の生活を主体とする「生活モデル」に移行しつつある。常に誰が主体なのかを意識しながら支援することが重要であると考えます。

本研究は、第1報に続く実践報告であり、Aが同世代の社会生活のあり方に意識が向けられたが、第3報では、Aが同世代の社会生活のあり方に関心を示し実際に行動に移したところに焦点をあて、分析を行っていきたいと考える。

なお、本研究は、第21回日本精神障害者リハビリテーション学会において発表したものを一部の内容に加筆・修正を加えたものである。

謝辞

研究にご協力いただきましたA氏とスタッフの皆様、また、研究結果の公表を許可してくださいました施設長、看護部長に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 今後の精神保健医療福祉のあり方等に関する検討会。厚生労働省。
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/09/dl/s0924-2a.pdf>, (2009.09.24)
- 2) 末安民生, 吉浜文洋, 立森久照, 他: 精神科医療の地域移行に関する効果的介入方法の検討, 障害者自立支援調査研究プロジェクト報告書, 53-54, 2008
- 3) 前掲書2), 67
- 4) 近藤浩子, 岩崎弥生: 慢性精神障害者の退院を支援するグループ・アプローチに関する研究(第1報), 千葉看護学会誌, 14(1), 44-52, 2008
- 5) 坂田増弘, 富沢明美, 他: 国立精神・神経医療研究センターにおける地域精神科モデル医療センターの概要, 日社精医誌, 21, 392-395, 2012
- 6) 福浦善友: 精神科デイケアにおける長期利用者への看護に関する一考察(第一報)ー利用者が社会生活に目を向け始めた場面を通してー, 宮崎県立看護大学研究紀要, 13(1), 16-28, 2013
- 7) 前掲書5), 393
- 8) 向谷地宣明: 当事者研究ー自分自身で, とともにー, 精神科臨床サービス, 10(4), 31, 535, 2010
- 9) 薄井坦子: 講演集 科学的な看護実践とは何か(上) 看護の実践方法論, 146, 現代社, 2003
- 10) 前掲書9): 147
- 11) 海保静子: 育児の認識学 こどものアタマとココロのはたらきをみつめて 第1版, 119, 現代社, 2001
- 12) 薄井坦子: 何がなぜ看護の情報なのか, 58-59, 日本看護協会出版会, 1997
- 13) 斉藤しのぶ, 和住淑子, 青木好美, 他: F. ナイチンゲールにおける人間の発展過程に関する一貫した見方ー『思索への示唆』献辞よりー, 総合看護, 1, 17-28, 2002
- 14) 薄井坦子: 科学的看護論 第3版, 29, 日本看護協会出版会, 2010
- 15) チャールズ・A・ラップ／リチャード・J・ゴスチャ: ストレngthsモデル 精神障害者のためのケースマネジメント[第2版], 113, 金剛出版, 2008
- 16) 池淵恵美: リカバリーを支援するための技術総論ーどのような理念, 支援構造, 技術がリカバリーを促進しうるかー, 精神科臨床サービス, 10(4), 502-503, 2010
- 17) 坂本明子: リカバリーの可能性を広げる場所として, 精神科臨床サービス, 10(4), 479-481, 2010

Nursing care for long-term user of psychiatric day service: Examination of a schizophrenic user's awareness of social lives of his own generation

Yoshitomo Fukuura

【Key words】 long-term user of psychiatric day service, social lives of one's own generation,
individual support, working, family